

氏 名	おく だ とし ひろ 奥 田 敏 廣
学位(専攻分野)	博 士 (文 学)
学 位 記 番 号	論 文 博 第 478 号
学位授与の日付	平 成 17 年 3 月 23 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 4 条 第 2 項 該 当
学 位 論 文 題 目	トーマス・マン父子の文学と同性愛エロス ——ガニュメデスの神話——

論文調査委員	(主 査) 教 授 西 村 雅 樹	助教授 松 村 朋 彦	教 授 若 島 正
--------	----------------------	-------------	-----------

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、日記を始めとする新しい資料の出現などにより、近年論じられることが飛躍的に増えたマン父子の同性愛をテーマとして取り上げ、全体を大きく2部に分けて考察したものである。第1部「《倒錯》の創造性」では、マン父子の文学における同性愛エロスの基本的な意味を考察し、それを基に第2部「同性愛エロスとナショナリズム」では、私的・審美的な問題としての同性愛エロスと社会的・政治的な問題という、個別に切り離して扱われがちなふたつのテーマ間の関係を取り上げ、分析した。

第1部「《倒錯》の創造性」では、マン父子の同性愛観について従来から存在していた、同性愛を肯定的に捉えるクラウスと否定的に捉えるトーマスという、いわば定石ともいえる見方を批判的に取り上げ、考察の出発点としている。なるほど、第一章で見るように、それは一方の当事者であるクラウス・マン自身の見方でもあるし、冒頭で触れたような新しい資料の出現に基づいた詳細で具体的な現在の研究も、そのような見方を基本的には変更するに至っていない。論者もまた、このような構図自体の完全な無効性を主張するつもりはないし、第二章で詳述したように、初期のクラウス・マンについては、それはほぼ当てはまっていると考えている。ただ論者は、このような見方には幾分の留保が必要であると考えている。というのも、第三章で『日記』を詳細かつ綿密に分析することによって明らかにしたように、保守的な《市民作家》であったトーマス・マンは、その一方でいわゆる《前衛作家》顔負けの自由な考え方を同性愛に対して持っていたからである。そういう意味で、トーマス・マンの同性愛観についてよく言われる《倒錯》という表現も、彼においては、異性間ではない同性間の愛情であることを指しているのではなく、また別の意味を持っていたと言える。すなわち、根源的で盲目的なエロスの情熱が、その対象について理性的に考え判断する分析的認識によって普通は損なわれ、解体されかねないのに対して、むしろ彼においては両者が共存するのみならず、さらに前者が後者によって高められさえするというエロスのあり方である。

とはいえ、トーマス・マンにおける盲目的なエロスの情熱と解体的・分析的認識の関係ないし優位性は、きわめて微妙な問題であり、さまざまな側面を持っていることも確かである。また、論者の最終的な関心は、作家の私生活や同性愛観自身ではなく、あくまで「マン父子の文学」である。そこで本論文では、トーマス・マンの同性愛体験の中でももっとも激しい情熱であった青春時代のパウル・エーレンベルク体験を同じように素材としながらも、分析的認識が優位になり悲劇的様相を呈する作品『ファウストゥス博士』を第四章において、盲目的なエロスの情熱がどちらかというと中心に展開する『ヨーゼフとその兄弟たち』を第五章において、それぞれ取り上げて考察した。

トーマス・マンと同性愛というと必ずといっていいほど問題にされる『ヴェニスに死す』は、マン自身の説明に端を発する《同性愛＝退廃＝死》という従来の枠組みから距離を置くために、主要な考察対象からあえてはずしてある。トーマス・マンというと、19世紀の世紀末的なデカダン、ブルジョア的退廃や《同性愛＝死》というイメージが抜き去りがたく存在するが、論者は、上記のような同性愛観を持つマンにとって、同性愛エロスは、そのような《退廃》や《死》と結びついていただけではなく、むしろ生命力と創作の根源的な力となっていたと考えるからである。そういう意味でまた、本論文で「ドン・キホーテ」の表象を意識的に多用したのも、愚直さとは対極にある老獪なエピソードと取られがちなこの作家が

持っていた、創作の根源にある生命力としてのエロスの情熱の意外な一途さと激しさを強調したかったからにほかならない。

本論文の第五章は、トーマス・マンのそういう同性愛エロスのあり方を、広く文明論的視野から位置づけようとした試みである。そこで扱った『ヨーゼフとその兄弟たち』が、マンのボイムラーによるバッハオーフェン受容への激しい糾弾にもかかわらず、『母権論』と関係していることは、近年強調され始めているが、それが具体的にいかなる影響であったのかは意見の分かれているところである。論者はその影響の核心として、よく言われる調和の神アポロに対する陶醉の神としてのディオニュソスというニーチェ流の構図ではなく、バッハオーフェン自身が言う「ディオニュソスの父性」を考えている。すなわち、物質的で無意識的な、そして愛が支配するが「死」と「死者」が生活の中で大きな位置を占め犠牲や復讐によって血塗られた「母性原理」から、意識的で精神的な、理性的で効率と進歩を追求する選別的で階層的な「父性原理」への発展途上に現れるという「ディオニュソスの父性」である。それは、激しく盲目的な根源の生命力を残しながらも、理性的認識を孕み持っている状態であり、作品に描かれたヨーゼフとムト・エム・エネトのエロスの情熱や、その際参考にした作者のパウル体験という同性愛もまた、まさにそういう「ディオニュソスの父性」の段階における情熱の有り様にほかならない。

それにしても、エロスの情熱が、根源の生命力として必ずしも《退廃》や《死》と結びつかないとはいっても、だからといってそれが悲しみや絶望と無縁であるとは限らない。むしろ、そのエロスの情熱が一途で激しいものであるほど、それが満たされない場合の絶望はより深いと言わねばならない。それは審美的で優雅な《エロスと退廃の官能性》などというありきたりの決まり文句では表現できない、より根源的な悲劇なのであり、より本質的に《死》とつながっている。そして、トーマス・マンという作家の場合、エロスの情熱はまた彼の創作の根源的エネルギーでもあったので、情熱の危機はすなわち彼の文学そのものの危機をも意味していた。上述したように、『ファウストゥス博士』を中心にして、優勢になりがちな分析的認識によって解体される危機に瀕したエロスの情熱の問題を扱う本論文の第四章は、また、現代文学におけるそのような創造の危機を、小説という形式と構造の歴史的分析を通して論じたものである。

さて、「同性愛エロスとナショナリズム」と題した第2部は、クラウス・マンの評論『同性愛とファシズム』をめぐって展開する。この時事的評論は、レーム事件に端的に表れているような、ナチズムと同性愛を結びつける当時の圧倒的大多数の世論を辛辣に非難したものであり、第1部で見たようなクラウス・マンの同性愛に対する考え方からすれば、当然といえば当然の反応であるが、あえて世論を敵にする敢然とした姿勢は賞賛に値するものであり、事実またきわめて正論でもあった。世論の姿勢は、同性愛に対する差別を増幅するのみならず、的外れの攻撃によってナチズムに手を貸すことにもなるからである。しかし、このような正論に対して、第1部で論じたように同性愛に対して自由で肯定的な見方をしていたはずのトーマス・マンは、「問題がある」というある種の異議を日記に書きとめている。このあいまいな記述が、いったいいかなる意味を込められたものなのか、具体的にはこの問題をめぐって本論文の第2部が構成されている。

その際、マン父子と政治の問題というと、「共和国」や「反ファシズム闘争」、「反ナチズム亡命」という、なるほど彼ら自身もよく使う表現であるが、進歩とか反動というレッテル張りしやすい手垢にまみれた概念がどうしても問題にされがちであるが、論者はあえてそれを排除し、そのような進歩か反動かというような議論に必ずしも収束しない「ナショナリズム」という視点を中心に考察している。冷戦が終わり無数の民族紛争が焦眉の問題となっている今日の世界で、大きな研究テーマとして脚光を浴び、いろいろな学問分野からのアプローチがみられる「ナショナリズム」である。「ナショナリズム」はその極端な場合としてファシズムやナチズムという形をとることもあるが、必ずしもそれらと一致するものではなく、より広い概念であり、また必ずしも否定的な（排他的・暴力的）概念に終始するものでもなく、（共同体としての）肯定的な意味を持つこともある。

このような「ナショナリズム」という概念を、上述した「ファシズムと同性愛の同一視」という問題を考える際のファシズムと読み替えることによって、すなわち「ナショナリズムと同性愛の同一視」というテーゼを立てることによって、トーマス・マンがあいまいな形にせよ否定はしていない「同一視」の意味を推測することが可能になる（あくまで、あいまいな形になっているのは、現実のナチズムに対する拒絶からであろう）。つまり、合理的思考に対する身体と情念の自己主張として、社会的・政治的な領域のナショナリズムと、個人的・審美的な領域の同性愛が結びつくのである。これは、王権や天皇制の研究を通して、権力が政治制度やイデオロギーないし経済の問題であるばかりではなく、すぐれてエロスの問題で

あることを示している近年の文化人類学の成果を、ある種先取りしたものと言えるであろう。

以上のようなナショナリズムと同性愛の結びつきを、第六章では、クラウス・マンの上記評論のオリジナル原稿とトーマス・マンの小説構想『フリードリヒ』を中心に考察し、検討した。前者には、トーマス・マンによる書き込みがあり、今までその存在が問題にされたことはなかったものの、その書き込みはきわめて示唆に富むものである。ちなみに、この論者の発見には、トーマス・マン・アルヒーフやクラウス・マン・アルヒーフに自ら出かけ資料を探索するとともに、作家たちのかつての秘書などにも連絡をとり、事情を問い合わせるという、フィールド・ワーク的な方法を含む文献学的作業が大きく寄与している。

第七章と第八章では、20世紀前半のドイツ青年運動の代表者である、ハンス・ブリュアーとグスタフ・ヴィネケンを取り上げた。彼らもまた、ナショナリズムと同性愛の結びつきを唱え、その理論の中心に置いていたからである。なるほど、ブリュアーとトーマス・マンの関係はしばしば言及されるものであるが、その際もつばら国家主義を唱える反動的思想のみが注目されている。しかし、一方でブリュアーは、性の問題に関して現代のフーコーを先取りするような自由な考え方をしていたのであり、そういう危険な革命的思想家としての側面を、第七章では彼の著書である『男性社会におけるエロティックの役割』を綿密に分析することによって明らかにしている。また、クラウス・マンとドイツ青年運動のつながりは、今まで必ずしも留意されてこなかったが、第八章で論者は、エーリヒ・エーバーマイアーというクラウス・マンにきわめて近い親友であると同時に、またヴィネケンがもっとも信頼する弟子でもあった人物に注目し、身体の重視に注目することによって、クラウス・マンとヴィネケンの親縁性を問題にした。ブリュアーにしろヴィネケンにしろ、今日では忘れられるか、反動的思想家として一蹴されがちな人物を掘り起こして取り上げ、同性愛の問題についてのマン父子との類似性を分析したが、それは同時に彼らの今日的意義を明らかにすることにもなったと考えている。

第九章では、クラウス・マンとヴィネケンの親縁性という前章の内容を受け、彼の最後の完成した長編小説『火山』を対象に、あらためてクラウス・マンの（ファシズムとの関係を含む）同性愛観を問題にした。この大作の評価は発表当時から非常によかったが、その評価の具体的内容は、現在にいたるまでおよそ正反対とさえ言えるほどかけ離れている。すなわち、政治的《闘争》の書と考えるか、はたまた《死》と《エロス》への耽溺の書と考えるかである。論者は、小説の題名にもなり、作品中にも繰り返し出てくる「火山」の表象を、（実は研究者がおろそかにしがちな点であるが）何の先入観もなく一読者として徹底的に考えることによって、そこで政治的《闘争》と《エロス》の問題が互いに排除し合うのではなく、同性愛を共通項として共存し、通底していることを示そうと試みた。ただし、そこでの共通項としての同性愛とは、若いクラウス・マンが果敢にもひたすら賛美しようとした同性愛ではなく、ときとして排他的で暴力的な相貌を帯びかねない同性愛である。反ファシズム闘争を通じてクラウス・マンは、たしかに変化していたのである。

第十章では、クラウス・マンの『火山』と、ある意味でよく似た受容史を持つトーマス・マンの小説『マリーオと魔術師』を取り上げた。後者もまた、政治的解釈と芸術的解釈をとともに経験してきたからである。そして、論者はここでもまた、ナショナリズムと同性愛の結びつきによって、政治的問題と審美的問題の共存が可能になっており、しかも同じように、両者の暴力的な側面と人と人を結び付ける情念としての側面というアンビヴァレントな両面がともに描かれているという結論を得た。

以上のように考察して来るなら、クラウス・マンとトーマス・マンは、なるほど実際にずいぶん違う作風であり、またそれを強調して対照的に扱われがちではあるが、意外に共通した側面を持っていると言わねばならない。すなわち、両者の文学とも、同性愛エロスを源泉としており、そのエロスが双面のヤヌスのように、排他的なナショナリズムと結びつきかねない暴力的な側面と、生の根源としての創造的な側面の両面を持つことを示している。ただし、両者の違いは、そのような認識をすでに第1次大戦の頃からもっていたトーマス・マンに対して、クラウス・マンの場合、反ナチズム亡命を通して文字通り悪戦苦闘しながら学び取らねばならなかったということである。おそらくこの違いにこそ、後者の早すぎる死の大きな原因のひとつがあるに違いないと論者は考えている。

論文審査の結果の要旨

トーマス・マン（1875-1955）とその長男クラウス・マン（1906-1949）の文学にかんする近年の研究において、しばしば

取り上げられるテーマのひとつに、同性愛をめぐる問題がある。トーマス・マンが、『ヴェニスに死す』（1913）に描かれているような少年愛と無縁ではなかったことは、すでにその生前から憶測されてはいたが、1970年代から90年代にかけて刊行された膨大な量の日記をはじめとする新しい資料の出現によって、彼の文学と実生活の両面において、同性愛的嗜好が予想以上に重要な位置をしめていたことが明らかになってきた。そして、こうした問題への関心に対応して、すでに早くから「同性愛作家」として知られていたクラウス・マンにもまた、新たな照明が当てられるようになったのである。本論文は、こうした近年の研究の動向と成果をふまえて、トーマス・マンとクラウス・マンの文学における同性愛エロスの問題に独自の観点から迫ろうとする試みである。

『《倒錯》の創造性』と題された第1部では、同性愛を肯定的にとらえる前衛作家クラウス・マンと、否定的にとらえる市民的作家トーマス・マンという、従来からの対立図式が批判的に検討される（第一章）。論者によると、初期のクラウス・マンについては、こうした見方がほぼ当てはまるものの（第二章）、トーマス・マンにかんしては、この図式には修正の必要があるという。論者はトーマス・マンの晩年の日記にしるされた同性愛体験の分析によって、根源的な情熱と分析的な認識とが対立するのではなく、互いを高めあいながら共存する特異なエロスのあり方を浮き彫りにする（第三章）。そして、トーマス・マンにおけるこうした「倒錯」の創造性が、彼の青年時代の同性愛体験とかかわりをもつ2篇の長編小説、『ファウストゥス博士』（1947）と『ヨーゼフとその兄弟たち』（1933-42）にそくして検証されるのである（第四章、第五章）。

「同性愛エロスとナショナリズム」と題された第2部では、クラウス・マンの評論『同性愛とファシズム』（1934）とそれに対するトーマス・マンの反応を手がかりにして、この二人の作家における同性愛とナショナリズムとのかかわりが考察される（第六章）。論者は、同性愛とナショナリズムを結びつける思想潮流の淵源をたどって、20世紀初頭のドイツ青年運動の代表者、ハンス・ブリューアーとグスタフ・ヴィネケンの思想を詳細に検討し、トーマス・マンがブリューアーから影響を受けており、クラウス・マンとヴィネケンとのあいだには親縁性が見られることを指摘する（第七章、第八章）。そして、反ナチス亡命者たちの姿を描き出したクラウス・マンの最後の長編小説『火山』（1939）と、ファシズムへの警鐘とも解釈されるトーマス・マンの短編小説『マーリオと魔術師』（1930）の読解を通じて、この二人の作家がともに、同性愛エロスのうちに、人と人を結びつける創造性と排他的な暴力性の両面を見てとっていたことが明らかにされるのである（第九章、第十章）。

本論文のすぐれた特色は、まず第一に、従来のこのテーマにかんする研究が、評論やエッセイ、もしくは手紙や日記といったテキストを対象とする傾向が強かったのにたいして、あくまでも文学作品それ自体を考察の中心にすえた点にある。第二章では、クラウス・マンの初期の長編小説『敬虔な舞踏』（1926）と『悲愴交響曲』（1935）において、同性愛にたいする偏見からの解放という「啓蒙」の立場と、同性愛の神秘化という「神話」の立場が混在していることが指摘される。第四章では、『ファウストゥス博士』に登場するヴァイオリニスト、ルーディーをめぐるエピソードにそくして、分析的認識によるエロスの情熱の解体が、現代文学における小説形式の危機と重ね合わせて論じられる。さらに第五章では、『ヨーゼフとその兄弟たち』のポティファルの妻ムト・エム・エネトとヨーゼフの関係が、トーマス・マンのバッハオーフェン受容との関連で考察され、『母権論』の「ディオニュソス的父性」に対応するような、官能性と精神性をかねそなえたエロスのあり方として位置づけられるのである。

本論文の第二の特色は、従来の研究においては切り離して扱われることが多かった、同性愛という個人的・審美的な問題とナショナリズムという社会的・政治的な問題を結びつけ、具体的な作品にそくして論じた点にある。第九章では、反ナチズム闘争の書と見るかエロスへの耽溺の書と見るかによって解釈が分かれてきた『火山』において、「火山」の表象がナチズムの野蛮と亡命者たちのエロスという一見無関係なものを結びつける役割を果たしていることが明らかにされる。また第十章では、『マーリオと魔術師』において、一方では魔術師チポラを通して同性愛とファシズムの結びつきが示されると同時に、他方では語り手とマーリオの関係を介して同性愛を基調とするおだやかな共同体の萌芽が描かれていることが指摘されるのである。

さらに本論文の第三の特色として、論者が、近年続々と刊行されつつある新しい文献資料を駆使するのみにとはとどまらず、自らチューリヒのトーマス・マン・アルヒーフやミュンヘンのクラウス・マン・アルヒーフに出向いて原資料の調査をおこなっていることがあげられる。第六章の論述では、クラウス・マンのオリジナル原稿の調査によって論者が発見したトー

マス・マンの書き込みが重要な役割を果たしており、こうしたフィールド・ワーク的な手法が、本論文の独自性には大きく寄与している。

むろん、本論文にもさらに望まれる点がないわけではない。第四章では、もう少し『ファウストゥス博士』のテキストに密着した論証が必要であるように思われる。また、第七章と第八章では、ブリューアーとトーマス・マン、ヴィネケンとクラウス・マンの関係について、さらに立ち入った考証が望まれる。だがこうした点も、本論文のもつ学術的価値をゆるがすものではない。

以上審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。2005年1月12日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。